

掘ってわかった

水と共生した古代のムラ

下田遺跡

展示解説資料

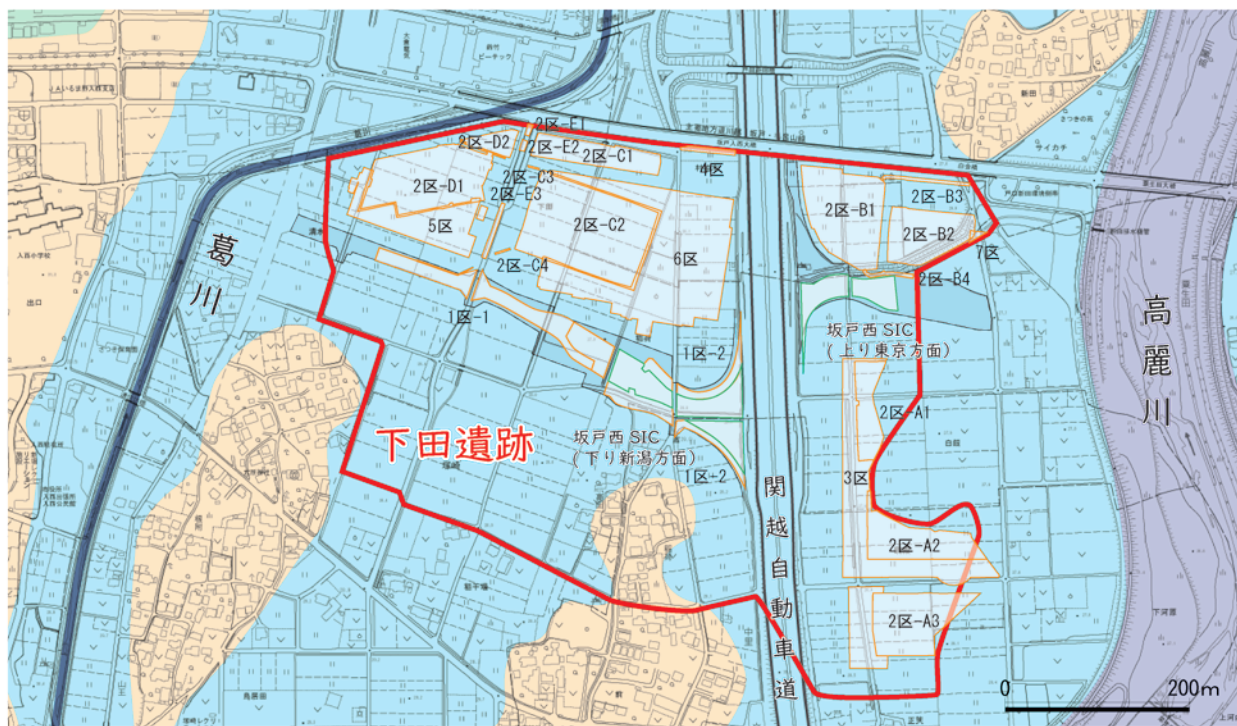
下田遺跡の立地と概要

下田遺跡のある坂戸市は、埼玉県^{そとちち}のほぼ中央部に位置し、西側には外秩^{ぶさんち}父山地を臨みます。荒川水系の入間川・越辺川・高麗川によって形成され^{のぞ}た扇状地性の台地である入間台地は、坂戸台地・毛呂台地・飯能台地の各^{あらかわ}支台に区分されており、市域は坂戸台地のほぼ全域と毛呂台地の東側、台^{いるま}地縁辺部の河川によって形成された沖積平野^{ちゅうせきへいや}で構成されています。

下田遺跡は、毛呂台地縁辺部から約400m離れた低地帯に位置し、お^{くずかわ}おね葛川と高麗川に挟まれた後背湿地^{はん}全域が遺跡の範囲となっています。遺^{いくすじ}跡内にはかつての河川の流路跡が幾筋も走っており、この地が度々河川の氾^{らん}濫の影響を受けていたことを物語っています。



現在の高麗川



台地
 低地（沖積地・後背湿地）
 市教委調査区
 県埋蔵文化財調査事業団調査区

周辺の地形とこれまでの調査範囲（令和4年8月現在）

下田遺跡の発見と調査

下田遺跡のある坂戸市大字中里^{なかざと}周辺地域（現西インター丁目、二丁目）では、平成22（2010）年に関越自動車道坂戸西スマートインターチェンジ整備事業に伴い、遺跡の所在を確認するための試掘調査が実施されました。重機で水田面を掘削すると遺構や遺物が多数発見され、地中に眠る遺跡の存在が明らかとなりました。最初の調査から約12年間のうちに、市教育委員会と県埋蔵文化財調査事業団によって合計9万㎡にもおよぶ大規模発掘調査が実施され、低地に生きた人々の歴史が次々と明らかになりました。



発掘調査の様子（平成24年（2012）撮影）

1. 弥生時代中期までの下田遺跡】

下田遺跡における最も古い活動の痕跡は、縄文時代にまでさかのぼります。下田遺跡では、縄文時代後期から晩期の土器、石器が発見されています。縄文時代後期（約3,500年前）の遺跡周辺は、ひとたび高麗川が氾濫すると一帯が水没する^{こうはい}後背湿地^{しっち}でした。この頃の下田遺跡は「居住の場」ではなく、弓矢をもって獲物を追いかけて、木材や天然資源を採集する「狩猟・採集の場」として人々の生活を支えていたのかもしれませんが。

弥生時代中期（約2,000年前）になると、エノキ属などの落葉樹が^{はんも}繁茂する^{かはんりん}河畔林が広がっていたとみられます。現在の高麗川本流からやや離れた調査区（2区-C）では、弥生土器の小破片がまるとまって出土していますが、定住の痕跡は発見されていません。



（上）縄文時代後晩期の遺物

（下）弥生時代中期の土器

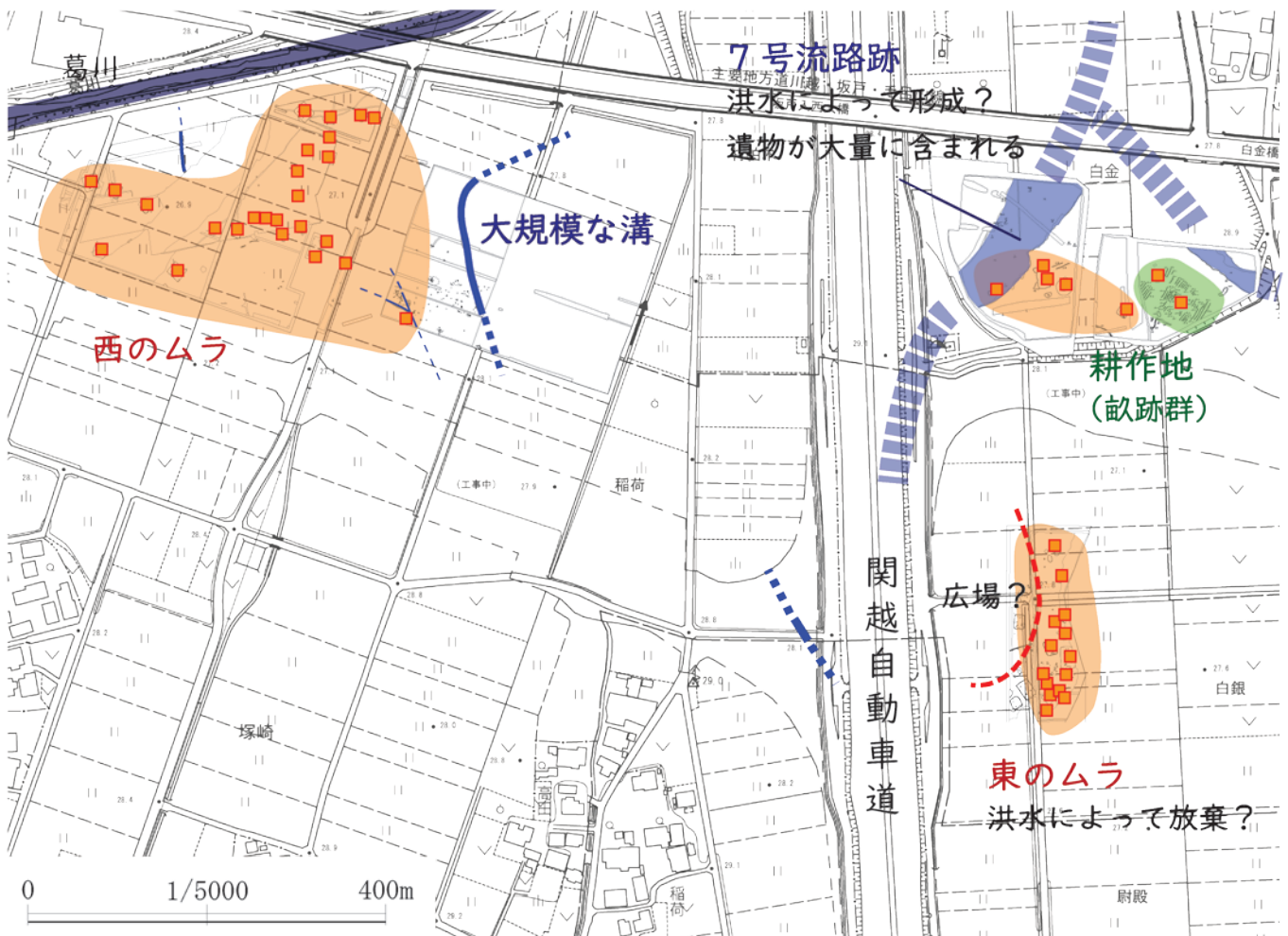
2. フロンティアを求めた人々

弥生時代後期（約1,900年前）になると、地下水位の低下に伴う後背湿地の乾燥化が進行します。環境変化によって居住可能となった新たな開拓地「フロンティア」へ人々の定住が始まりました。

初期の集落は遺跡東側で形成されます。集落は中央に広場を持つ^{たてあな}竪穴建物群で構成され、北側には^{こうさくち うねあとぐん}耕作地（畝跡群）が広がっていました。

遺跡の土を分析した結果、キビやアワなどの^{ざっこく}雑穀類や、イネの花粉が多数発見されました。発掘調査で水田は^{なりわい}見つかりませんが、生業として水田や畑で、複数種の穀物が栽培されていたことが明らかとなりました。

下田遺跡のある低地帯には、高麗川によって運ばれた^{ひよく どじょう}肥沃な土壌が堆積しています。人々は農業の好適地を求めて、肥沃な土壌と豊かな水資源を湛えたこの地へ進出を図ったのかもしれない。



■ 竪穴建物・竪穴状遺構 ■ 集落域 (推定) ■ 耕作地 (推定)

弥生時代後期～古墳時代初頭（吉ヶ谷式期）の下田遺跡

3. 集落の成長と移転そして終焉

弥生時代終末期から古墳時代初頭(約1,800年前)の下田遺跡では、東のムラから500mほど西に離れた、現在の葛川近くで新たな集落域が形成、発展していきます。それとは対照的に、これまで繁栄してきた東のムラは、建物数が急減し、衰退の一途をたどってしまいます。



弥生時代後期後半の集落

東のムラ周辺では。この頃に形成されたとみられる自然流路(7号流路)、が発見されており、大きな水流の変化が発生したことを物語っています。この環境変化が、居住地を川に近い遺跡の東側から、標高の高い西側へ移転する要因の一つであったとみられます。

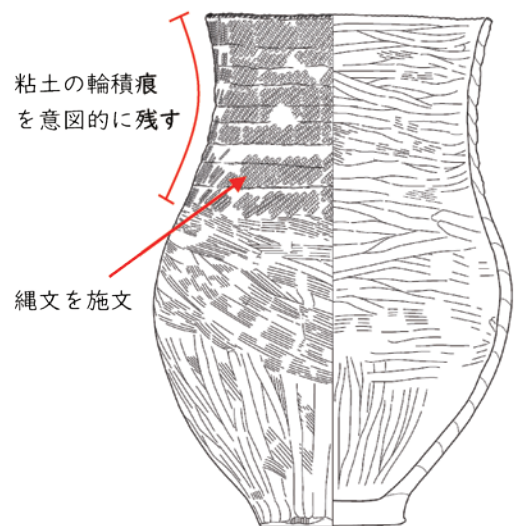
弥生時代のフロンティアでの生活は、高麗川の豊かな恩恵^{おんけい きょうじゅ}を享受する一方で、水害などの危険と隣り合わせの過酷な環境でもありました。

その後、弥生時代後期から続いた集落は、古墳時代初頭(約1,750年前)には完全に衰退し、集落^{しゅうえん}は終焉を迎えます。

下田遺跡は、弥生時代後期から古墳時代初頭(吉ヶ谷式期)にかけて継続的に営まれており、この時期の低地集落としては県内最大の規模です。

よしがやつしきどき 【吉ヶ谷式土器】

弥生時代後期の関東地方では、小地域ごとに個性豊かな土器様式が花開きます。弥生時代後期後半の比企・入間地域を中心とした埼玉県西部では、「吉ヶ谷式」と呼ばれる土器様式が成立します。吉ヶ谷式は、古墳時代初頭頃までこの地域の人々の土器文化として根づいていました。下田遺跡で発見されたこの時期の土器も大半が吉ヶ谷式です。



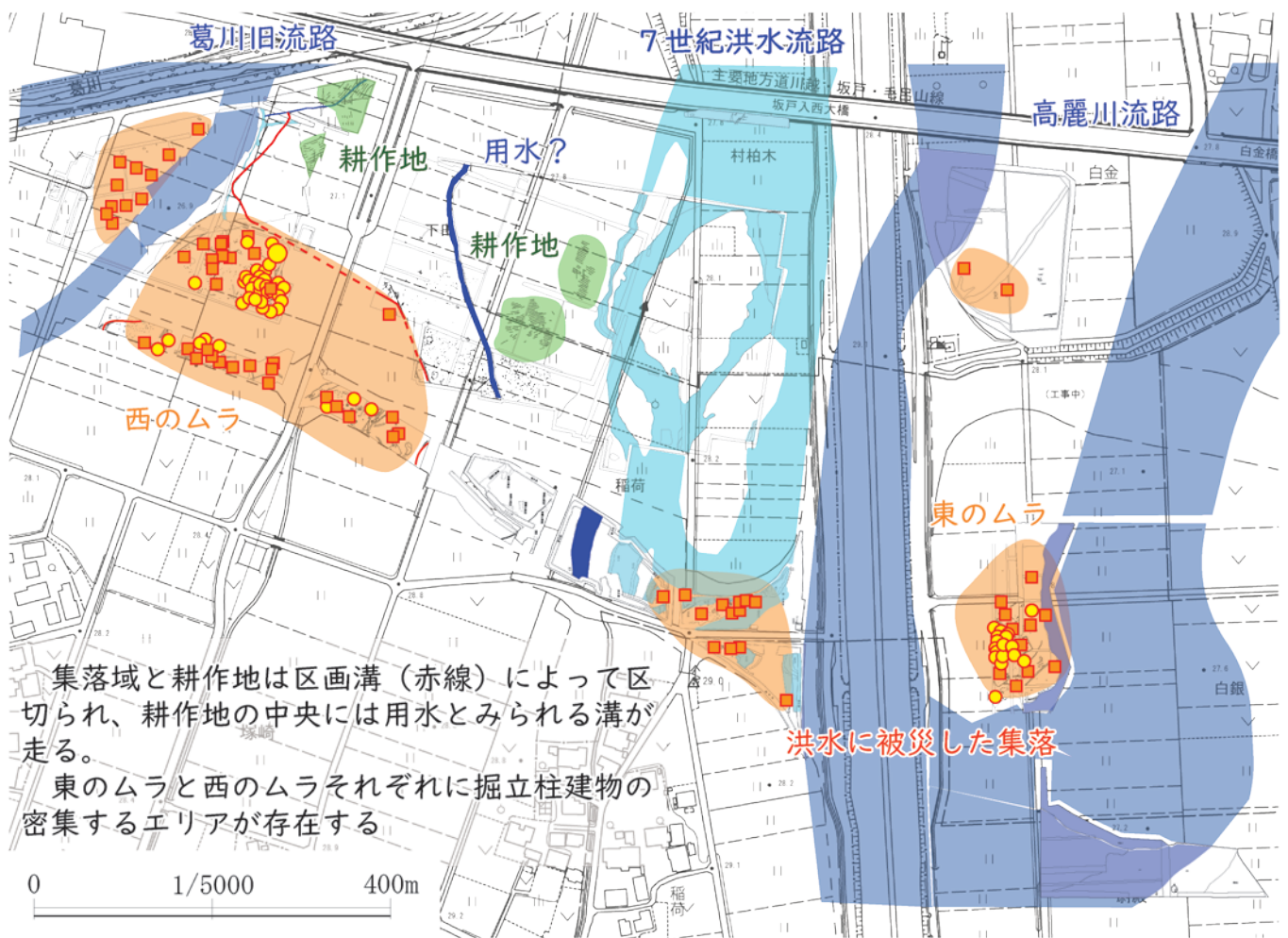
かめ
吉ヶ谷式の甕の特徴

4. 新たな定住者たち

長い空白の期間の後、下田遺跡は再び居住に適した環境へと変化します。古墳時代後期である6世紀後半（約1,400年前）の下田遺跡では、明るく開けた河畔性の雑木林が広がり、所々を流れる流路周辺には、ゴキツルなどの水湿地性の植物が繁茂しました。

6世紀末頃、集落域として適地化した後背湿地へ新たな定住者が遺跡の東側ほったてばしらたてものごんに集落を形成します。集落内は竪穴建物群と掘立柱建物群で構成され、建物群ごとにエリアがわかれています。

7世紀初頭には遺跡西側で集落が成立します。各集落は拡大を続け、7世紀中頃には数多くの掘立柱建物が建築され、東のムラは最盛期を迎えます。しかし、7世紀後半、竪穴建物を削り取るほどの氾濫が発生し、東のムラが被災し、放棄されます。



- 竪穴建物・竪穴状遺構
- 掘立柱建物
- 集落域（推定）
- 耕作地（推定）

古墳時代後期～奈良時代初頭の下田遺跡

5. 「下田ムラ」の生業

発掘調査では、様々な生業にかかわる遺物や活動の痕跡が発見されています。

糸を紡ぐための紡錘車や、編み物を

作るための編物石、漆状の付着物がついた土器などの出土品からは、集落内に多種多様な生業があったことが推察できます。川沿いの集落ならではの漁獵関連遺物として、投網に使用した土製の錘も出土しています。

また、下田ムラでの特殊な生業として土師器の製作が挙げられます。調査では、土器を焼成したとみられる穴（土器焼成土坑）が複数発見されました。また、5区8号竪穴建物では、建物中央部のピット内からロクロの棒軸とみられる木製品が地中に刺さったままの状態出土しています。下田ムラには土師器の製作を担う集団が居住していたとみられます。



発見されたロクロピット（赤丸）とロクロの棒軸

6. 集落域から生産域へ

古墳時代の「下田ムラ」の性格を考える上での重要な手掛かりとして、様々な地域から運ばれてきた遺物の存在が挙げられます。

特に登り窯で焼かれた軟質陶器である須恵器は、東海地方の湖西窯跡や猿投窯跡の生産品が数多く発見されました。出土品は破片資料も多く、全容は不明ですが、発見された数よりもさ



東海地方(湖西窯跡)産の須恵器

らに多くの須恵器が下田ムラに持ち込まれていたとみられます。須恵器の搬入は、ムラの最盛期と同様に7世紀末頃から急増し、8世紀初頭の衰退期まで継続していました。

河川沿いの集落である下田ムラは、荒川水系を利用した水上交通の要衝となる拠点集落であり、須恵器などの搬入品も東京湾方面から水運によって運ばれてきたのかもしれない。

7. 集落域から生産域へ

奈良時代（約 1,300 年前）になると、日本列島は律令国家の道^{りつりょうこっか}を歩み始めます。坂戸市周辺においても勝呂廃寺^{すぐろはいじ}や東山道武蔵路^{とうさんどうむさしみち}などが作られ、これまでの古墳時代とは異なった新しい時代が幕を開けます。この頃の下田遺跡では、周辺集落との再編の流れの中で、集落が解体されます。

そして、その肥沃な土壌を生かした生産域として新たな土地利用が始まります。

入西地区の低地^{じょうりがたすいでん}一帯で条里型水田^{かいこん}（※1）の開墾が始まり、下田遺跡もその一部に組み込まれていた可能性があります。

遺跡内では、奈良時代から平安時代にかけて開削された水路とみられる溝状遺構が多数発見されており、水田の畔^{あぜ}の跡も検出されています。水田地帯に点在するこのころの竪穴建物^{のうはんき}は、農繁期に利用していた建物の可能性もあります。

※1 条里型水田：一辺 109m の方形区画によって規格整備された大規模な水田

8. 中世以降の下田遺跡

11 世紀以降の下田遺跡では、ナデシコ科やスミレ科のような野草が繁茂しており樹木は少なく、草が広がっていました。水田周辺に生えるような水辺の雑草はほとんどなく、水田の大半は耕作放棄地^{こうさくほうきち}や休耕田^{きゅうこうでん}のような状態だったようです。



中世の柱穴群

13 世紀には周囲を溝で区画した掘立柱建物群が密集して形成されており、耕作地の中に集落や屋敷地が点在する近世農村に近い景観が広がっていたようです。屋敷地とみられる柱穴が集中したエリアでは、井戸^{どこうぼ}や土壇墓^{せいじ}などが発見されており、青磁などの支配者層が所有する高級品の破片も出土してい

ます。

下田遺跡の西側台地上には中世の館跡群、北側には中世の^{いもじしゅうだん}鋳物師集団の集^{こだまとうぶし}落である^{かないびーいせき}金井B遺跡が存在しており、これらの中世の遺跡群や、^{だん}児玉党武士^{にっさいし}団の入西氏との関連も想定されます。

9. 水との共生、そして祈り

通称「暴れ川」ともよばれる高麗川が、^{はんらんげん}河川の氾濫原内に位置する下田遺跡に与える影響は絶大でした。高麗川は豊富な水や天然資源、肥沃な土壌などといった恩恵を享受する反面、ときに自然の^{もうい}猛威を振るう^{いふ}畏怖の対象でもありました。

弥生時代後半段階には水辺で、火が^{ひんぱん}頻繁に焚かれた跡が見つかり、何らかの^{さいしこうい}祭祀行為^とが執り行われていた可能性が有ります。

古墳時代終末期には、西のムラで「コ」の字状の溝で囲まれた特殊な平面形を持つ掘立柱建物（29号掘立柱建物）が発見されました。建物の本体は2×2間の^{そうばしら}総柱（高床の施設）で、南西側には付帯施設が張り

出します。溝内からは、装飾品である金銅製の耳環1点が出土しました。

建物の平面形や、周溝の存在する点が、古代の^{じんじゃいこう}「神社遺構」と類似しており、宗教的施設であった可能性があります。

「感謝」と「畏怖」の念をもって自然と向き合うことの大切さを、過酷な環境を生き抜いた先人たちから学ぶべきなのかもしれません。



(上)勾玉とミニチュア土器(弥生時代後期)
(下)29号掘立柱建物(古墳時代終末期)

第25回坂戸市埋蔵文化財出土品展

掘ってわかった **下**田遺跡 水と共生した古代のムラ

展示解説資料 2022年(令和4年)8月 坂戸市教育委員会

時代	下田遺跡での主なできごと
縄文時代後・晩期 (約4,500~3,500年前)	氾濫時には滞水する後背湿地 付近に集落があり狩猟採集の場として利用か？
弥生時代中期 (約2,200年前)	河畔性の落葉樹が繁茂する。 土器片が少量出土。定住の痕跡はない。
弥生時代後期後半 (2~3世紀)	後輩湿地が乾燥化し、東のムラが成立。 農耕はイネ・アワ・キビなどの穀物を栽培。
弥生時代終末期 (3世紀)	自然流路が出現。高麗川の大規模氾濫発生か？ 東のムラの規模が縮小し、新たに西のムラが成立する。
古墳時代初頭 (3世紀)	遺跡周辺の環境が変化し、居住に適さない土地となる 大規模な集落は衰退し、竪穴建物は散発的になる。
古墳時代中期 (5世紀前半)	後背湿地は帯水する環境。水田耕作地として利用か？ 竪穴建物は散発的。
古墳時代後期 (6世紀後半)	後背湿地が再び乾燥化し、東のムラが成立する。 明るく開けた人里植物が生育する環境が広がる。
古墳時代終末期 (7世紀前半)	西のムラ成立し、各集落は継続、拡大する。
古墳時代終末期 (7世紀後半)	高麗川の大規模氾濫発生。東のムラが被災する。 東のムラが放棄され、西のムラが最盛期となる。 東海産須恵器が搬入されるようになる。
奈良時代 (7世紀末~8世紀初頭)	西のムラが衰退し、遺構数は急減する。 律令国家成立に伴う集落の再編成か？
奈良時代 (8世紀後半)	流路開削。水田耕作地化。集落の主体は遺跡外に移転か？ 769年大伴部直赤男西大寺へ「入間郡粟生村」の土地を寄進。
平安時代 (9~10世紀)	流路開削。水田耕作地が広がる。低地には竪穴建物が点在。 10世紀には遺跡北側に小規模な集落が成立。
中世 (11世紀以降)	水田耕作地が草地化（休耕田・耕作放棄か？） 13世紀には、武士層の屋敷や集落が成立する。

用語解説

【竪穴建物（たてあなたてももの）】

地面に掘られた竪穴の上に屋根を葺く半地下式の建物。「竪穴式住居」とも言われる。居住用だけではなく、工房や作業場などの目的でも使用される。

【掘立柱建物（ほったてばしらたてももの）】

柱穴に柱を据えて建てる建物。柱の配置によって建物の構造や規模、用途などを推測することができる。

【土坑（どこう）】

地面に人為的に掘られた穴。目的や時代などによって形状や大きさは異なる。

【土師器（はじき）】

古墳時代以降に作られた素焼きの焼き物。焼き上がりは赤褐色や黄橙色となる。

【須恵器（すえき）】

古墳時代に朝鮮半島から伝来した硬質の焼きもの。ロクロで成形され、登り窯を用いて焼成する。焼き上がりは青灰色や灰色をなす。

【灰釉陶器（かいゆうとうき）】

植物を焼いた灰から作った釉薬が塗られた陶器。平安時代初頭に濃尾地方（現在の岐阜・愛知県の一部）で生産が開始された。

【かわらけ】

中世につくられた素焼きで皿状のやきもの。

【坏（つき）】

皿よりやや深い器。高坏は坏に脚がついたもの。

【碗（わん）】

坏より深い半球状の器

【甑（こしき）】

調理具の一種。煮沸具である甕の上に設置し、蒸気を利用して食材を蒸す。

【紡錘車（ぼうすいしゃ）】

糸をつむぐときに使う紡錘につけたは錘の部分。円盤型やそろばん玉のような形のものがあり中央には棒軸を通すための孔が貫通している。

【勾玉（まがたま）】

装身具や祭祀具の一種で、記号のコンマ（,）に似た形をしている。朝鮮半島でも多く発見されている。

展示見学中にご質問やご不明な点がございましたら、会場内係員にお声がけください。

